

「検証」

—初稿—

2024/4/20

雨森 れに

〈人物表〉

鵜野 芳也よしや

(30) 陽キャな兄

鵜野 元也もとや

(28) 冷静沈着な弟

牧沢 卓

(49) 死体

〈ログライン〉

鵜野芳也と元也が、牧沢が死んでいる現場に残されたダイイングメッセージを推理し、犯人に繋がりそうなものを消し去る。

〈ねらい〉

- ・テーマ触媒 ミステリー
- ・叙述トリック風

1. 牧沢宅・書斎(昼)

暗い書斎、カーテンの隙間から自然光が差し込んで
いる。棚には競馬グッズやカードゲームが並んでい
る。

床の血だまりに牧沢 卓(49)の死体。

牧沢の足元に立つスーツ姿で白手袋の鵜野 芳也(30)と鵜野 元也(28)。

芳也 「なんか隠してるな」

うつ伏せになっている牧沢の胸元に右手が添えてあ
り、その下に差し込むようにノートが入っている。

芳也、牧沢の隣にしゃがみ、ノートを指差す。

元也、血の広がりを感じしながら

元也 「重要な証拠かもしれないですね。汚れないうちに取り出
しましょう」

芳也 「だな。(ノートを引き出しながら) っと、また血が……」
更に広がる血だまり。

元也 「力任せにやるからですよ。中身は私が調べます。ほら」
元也、立ったままノートを求める。

芳也 「あいよ。最初はなっから俺が確認する気はねえよ。そういう
のはエリートのお前が得意だろ」

元也 「動物的な勘は兄さんのが鋭いですよ」

芳也は鼻で笑い、牧沢から距離を取った位置に移動
し、あぐらをかく。

元也、ノートの書き終わりを見つける。

ノートには「10-9 Bro」と走り書きされて
いる。

元也 「10-9? いや、それにしても1と0の間が開きすぎ
ている……それにBro?」

芳也 「Bro? あれか?」

芳也が棚に置いてあるカードゲームの箱『LET'S
GET REAL BRO.』を指差す。

元也、箱を開く。

中にはぎっしりと写真が入っている。

裏返すと「3―1」「16―4」など書いてある。

元也 「この中に10―9があれば、それが犯人……ということでしょうか」

芳也 「なんだこの量。すぎえな。しかも牧沢本人が写っているのはないな。全部トモダチか？」

写真の撮影場所はほとんどが外で、写っている人間の年代や性別はバラバラ。何度も写っている人間もいる。

芳也 「なあ。これ全部競馬場じゃないか？ これとこれ、多分当たり馬券持つてる。この日、俺大損したから覚えてるわ」

元也 「当たった仲間の記念写真を撮っていた、ということですね。それなら10―9で当たった日付を探せば」

芳也 「そう。犯人がわかるってわけ」
芳也、スマホで検索する。

その間にも元也は写真を1枚ずつ確認している。

芳也 「ない」

元也 「え？ 何がないって……」

芳也 「10―9で当たった日がない」

元也 「じゃあ0―9とか」

芳也 「お前、競馬知らねえのか。0なんてないわ。馬連、馬単、2列目3列目だけでとかも見てみたけど、ないんだわ」
「ちよつと言ってる意味が」

元也 「そんな番号で記念撮影する理由がないってことだよ。仕方ねえ。全部確認していくか」

芳也、諦めたように座り込み、残りの写真をよこせと手で合図する。

元也、写真の束をすべて芳也に渡す。

元也 「あとをお願いします。私は牧沢のスマホを調べます」

芳也 「分業な。おっけ」

元也、机に置いてあるスマホを手取る。
そのまま牧沢に近寄り、右の親指を画面に押し当てる。

元也 「パスワードのいらぬ時代は便利なもんですね」

芳也 「現場で検証できる奴の特権だな」

元也 「本当はこんなことしたくないんですけどね。兄さんは躊躇しないから現場荒らして言われるんですよ。あ、これも2つの番号つけてる人間がいますね」

芳也、手を止め、笑顔で、

芳也 「こっちはもうやらなくて——」

元也 「あと数枚じゃないですか。全部確認するのは鉄則ですよ」

元也、いじけたように確認作業に戻る。

元也 「牧沢はLINEで相手の名前に5—9とかつけてますね。でも、10—9はない。0—9もない」

芳也 「やっぱり写真にもなかったよ。ちゃんと、全部、確認した」

元也 「困りましたね。振り出しに戻っちゃいましたか」

芳也、口元に手を当てて書斎を見渡す。

芳也 「Broの箱があったのはあの棚。棚は10段か」

芳也、本だけが並んでいる9段目を漁り始める。

元也 「私は10—9、0—9になるような電話番号がないか探してみます」

元也、牧沢のスマホを操作する。

× × ×

芳也、本の隙間に封筒を見つける。

中身は10万円と芳也と牧沢のツーショット写真。

芳也 「だいぶ減ってんじゃねえか」

芳也は封筒を胸ポケットへねじ込む。

× × ×

元也 「通話記録で該当するのは……『鵜野税理士』だけですか」

元也のスーツには税理士バッジ。

元也、スマホを操作し続ける。

× × ×

窓からの陽がオレンジ色になっている。

芳也 「俺のほうは問題なし。多分見落としもない」

元也 「私のほうもあらかた削除できました」

芳也 「なるほどな。お互いに見つけたものがある時が一番怖えんだ。暗号も確かに解読できてるわけじゃないし」

元也 「1のあとの空白が慌てて書いたからなのか、意図してなのか。そもそも意味のある暗号なのかもわかってないですからね」

芳也 「牧沢はひねくれた人間だったからな。なんか捻りがあるんだと思うわけよ」

元也 「それでいてお金のことは几帳面すぎるぐらいでしたし」

芳也 「几帳面ってかケチだろ。一緒に金出して買った馬券が100万になって……あっ」

元也 「持ち逃げされたんですよね」

芳也 「そうじゃなくて。10-9だろ。100万だろ。この封筒！」

元也 「10万……100-90で10万？」

芳也 「こいつ！ ふぎけやがって！」

芳也、牧沢を蹴ろうとする。

元也 「ちよっとちよっと。そうだとしても、それ以上に牧沢のタンズ貯金、貰ったじゃないですか。でも、結局Broがわからないですね」

芳也 「それも今思い出したんだけど、LINEで勝った報告すると、牧沢がよく『GGBro!』って言ってきたんだよな」

元也 「LINE? LINEに兄さんの名前なんて……あ、非表示リスト! しかも10-9ってついてますよ!」

芳也 「ちよっとそれ貸せ!」

芳也、スマホを真剣に見つめる。

芳也 「やっぱり。この数字はいくら借りてて、いくら返すの式だ。俺のダチから聞いてたのがいくつか当てはまる。マジでこいつふぎけんだよ」

元也 「お金も貰ったし、本人殺せたし、もういいじゃないですか。暗号も解けましたし、帰りましようよ。ほら(牧沢を指差して)死後硬直が始まっていますよ」

元也、怒りが冷めない芳也を宥めるように背を叩く。

芳也 「夢で会ったらまた殺してやる」

芳也と元也が書斎を去る。

血だまりの端のほうで乾き始めている。

外は賑わっているが、喫煙所の中には人が少ない。

元也 「そういえば。非表示リスト、消しました？」

芳也 「分業だからお前の仕事だろ」

元也、頭を押しさえて、

元也 「やらかした」

芳也 「大丈夫。こういうのは大体壊されちゃうもんだし」

芳也、牧沢のスマホを取り出し、地面に落とす。

勢いよく足で踏み、ぐりぐりと粉碎していく。

元也 「本当に、動物的と言うか、躊躇しないですよね」

芳也 「エリート君にできないことを俺がやってるだけだっただけの」

芳也、アイコスを吸う。

芳也 「一仕事終えた後の煙草はうまいなあ。次はいつよ？」

元也 「またタンス貯金してる人間が相談に来たらですね」

芳也 「早く海外生活してえな」

元也 「今回は1200万。あと3800万。そしたらこんな国

トンズラですよ」

芳也と元也、悪だくみしている表情で笑い合う。

おわり